

開元寺版大藏經の〈修〉の世界についての一、二の問題

——墨丁追刻と題記入れ木——

牧 野 和 夫

はじめに

開元寺版の補刻に関する事例報告は、東禪寺版の場合に比較して少ない。とくに墨丁と追刻についての報告はいまだ管見にいるものはなく、極めて乏しい、といえよう。かつて「宋刊一切経に関する一、二の問題」と題して公開研究発表会で行った（2004年5月14日於京都国立博物館会議室）発表の一部で東寺藏大藏経の内、開元寺版に存する墨丁のことに若干ふれたが、詳しく追及する機会のないままに歳月が過ぎた。東寺藏大藏経の内の『度世品経』巻四の5板の4・5面の間に墨丁があることを始め、少なからぬ数の墨丁の存在を指摘した（『実践国文学』75号、

2008年3月刊再録）。本稿に、あえて資料を加えて開元寺版の墨丁を扱うのは、2009年8月30日から9月2日の会期で開催された国際学術シンポジウム（於中国杭州市浙江工商大学日本文化研究所）において「日本現存宋版大藏経についての一、二の問題」の題目で発表し開元寺版の墨丁に詳細な考察を加える予定であったが、時間的な制約もあり詳述に及ばなかったからである（発表内容は、近く中国で論集として刊行予定。ご参照願えれば幸いである。若干の同文箇所を共有することも御海容賜りたい）。

一、開元寺版の墨丁と追刻…事例報告―倭成図書館蔵『大般若波羅蜜多經』

杭州での発表にも触れたが、倭成図書館には、巻四・十

二・四十八・六十・一百一十一・二百四十七・二百四十八、合計七帖の開元寺版『大般若波羅蜜多經』が所蔵されている。

佼成図書館蔵『大般若波羅蜜多經』卷十二の〈題記〉に「前任福州東禪寺沙門祖意募諸路四衆寄開元寺補完經板恭為／今上皇帝祝延聖壽文武官僚同資祿位／至正元年辛巳歲月 日助縁比丘竟正謹題」

とある通り、題記中に「至正元年辛巳」という元代の至正元年の年記があり、一三四一年に刊行と考えられようが、至正元年の年記は、帖全体の刊行の年かどうか、つまびらかにしない。しかも、③板 1・2面間「地 二卷 三 遂刀」・④板 1・2面間「地 二卷 四 遂」は印面漫漶、刻工「遂」とあり、十二世紀末刷印の知恩院蔵本や醍醐寺蔵本の刻工名③板「遂刀」・④板「遂」と同じで、同版葉かと推測できる。即ち、至正元年修と理解すべきであるが、更に佼成図書館蔵『大般若波羅蜜多經』卷一百一十一に、⑫板（5面1紙） 2・3面間「呉 一卷 十二 大徳丁未經司刊換」・⑬板 1・2面間 大徳丁未經司刊換」とある。大徳丁未年は、大徳十一年であり、一三〇七年の補刻葉が認められ、通修版であることが判明する。

この「元代通修」開元寺版『大般若波羅蜜多經』のツレ

か、と思われるものは、「哈佛大学燕京図書館」などにも所蔵され、今後の調査に俟つことは多い。

この佼成図書館蔵開元寺版『大般若波羅蜜多經』には、墨丁が三例認められる。

大般若波羅蜜多經 卷二百四十七 閏

①板 2面2行目「一 [黒] (墨丁約6字分) 又刀」

②板 1・2面間版心 「閏 七卷 二 [黒]

(墨丁約6字分) 王底」

大般若波羅蜜多經 卷二百四十八 閏

②板 1・2面間版心 「閏 八卷 二 [黒]

(墨丁約6字分) □ (判読不明) 信」

この墨丁箇所を残す三葉が、いつの補刻時期に係るものか、定かではない。開元寺版の墨丁についての報告を先の東寺蔵大蔵經の開元寺版に指摘した以外に管見にして知らないこともあり、貴重な事例であるので掲示しておく。今後の調査において、更に増加することを期待する。

ここで佼成図書館蔵『大般若波羅蜜多經』のうちで留意すべき施財刊語と刻工名について摘記し若干のコメントを附す。

大般若波羅蜜多經 卷六十 宙

④板 1・2面間「宙 十卷 四 嘉定庚辰経司換鄧洽

⑤板 1・2面間「宙 十卷 五 甲辰日本國比丘淨刹捨」

⑧板(5面1紙) 1・2面間「宙 十卷 八 日本国北京法華寺比丘意教捨」

⑫板 2・3面間「宙 十卷 十二 咸淳戊辰常住餘利刊換 何」

⑤板の施財刊語から日本僧淨刹の捨財時期が「甲辰」と判明する。「淨刹」の名は書陵部蔵一切経開元寺版にも見え、「甲辰」は淳祐四年(一二四四)〈日本の寛元二年に該当〉である。意教頼賢もその頃以前の入宋であろう。④板の「嘉定庚辰」は、嘉定十三年で一二二〇年にあたる。「咸淳戊辰」は、咸淳四年、一二六八年に該当する。「鄧洽」の補刻した板を金沢文庫蔵大蔵経の東禅寺版『大般若波羅蜜多経』に拾うならば、次の三事例を掲示できる。

8 大般若波羅蜜多経卷八「⑦廣東運使曾寺正捨⑦鄧洽」

36 大般若波羅蜜多経卷四〇「②廣東運使曾聖捨②鄧洽」

198 大般若波羅蜜多経卷二二〇「①鄧洽①廣東運使寺正曾聖捨」

東寺蔵宋版大蔵経で補えば

大般若経第百十九①板1・2面間版心「廣東運使曾寺正捨／鄧洽」

大般若波羅蜜多経卷第一百三十三「宿 三卷 七 鄧洽刀／廣東運使寺正曾聖捨」

すべて施財刊語「廣東運使寺正曾聖捨」の葉を担当している。曾聖というより広東の官署の公費をもって賄われたというべきか、その版刻に施財した時期は、一二二〇年の頃に位置づけてよいか、と思われる。④板の「嘉定庚辰」、嘉定十三年で一二二〇年にあたることにほぼ合致する。

曾聖が刊行に係わった外典の具体的な典籍一点を紹介しておく。宋代の寶慶元年(一二二五)刊『新刊校定集註杜詩』存六卷(全三六卷)三冊である。静嘉堂文庫所蔵で『静嘉堂文庫宋元版図録』(200年4月 汲古書院)に書誌事項と書影が収載されている。参考までに掲出する。

『静嘉堂文庫宋元版図録解題篇』(平成4年4月1日刊 汲古書院)

104 新刊校定集註杜詩 存六卷 唐杜甫撰 宋郭知達編

宋寶慶元年刊(廣東漕司)三冊
寸法 二九・二×二一・〇 糶

版式 左右雙行邊(二四・三×一七・七糎)有界 每半葉
九行 每行一六字 注文雙行一六字 版心線黒口 雙黒魚
尾 刻者姓名 大小字数

刊記 ○(卷七)一一各卷末に一行刊記 寶慶乙酉(一

二二二五)年 廣東漕司鈔板 ○(卷七・八末尾に四行

列銜)進士陳大信/潮州州学賓辛安中/承議郎前通判韶州

軍州事劉銜同校勘/朝議大夫廣南東路轉運判官曾璽

宋諱 玄朗敬弘匡恒貞楨徽桓樹邁慎敦廓等

刻者姓名 吳文彬(文彬) 上官生 劉士震(士震) 郭淇

仁 岑友 鄧拳 吳文 洪恩 黃申 黃仲 朱榮 葉正 蕭

楊宜 楊茂 劉元 劉千 劉文 劉用 魯時(以下、略)

私書の他に、こうした典籍の刊行に長財を投じた宋代の

転運司の活動を、むしろ軸に考えるべき点も多い。地方官

公署の刊刻への関与を内外典にわたる両面から追及するこ
とが重要であろう。

倭成図書館蔵本において次に留意すべき事例を摘記する

と、

大般若波羅蜜多經 卷四八

④板 1・2面間「字 八卷 四【泉州德化祖明捨】

付詔刀」

⑧板 2・3面間「字 八卷 八 日本国北京西山法華
寺比丘乘蓮捨 浚刀」

大般若波羅蜜多經 卷二四七

⑥板 1・2面間「閏 七卷 六 日本国比丘淨刹捨」

⑦板(5面1紙) 1・2面間「閏 七卷 七 □(文

字の末画少々残)宗萬捨【詔刀】

⑫板 2・3面間「閏 七卷 十二 日本国比丘淨刹
捨」

卷四十八④板「付詔」・卷二四七⑦板「詔」についても

「鄧捨」と同様のことがいえる。

刻工名「付詔」の板を金沢文庫蔵大蔵經の東禪寺版『大

般若波羅蜜多經』に捨うならば、次の事例を掲示できる。

275 大般若波羅蜜多經卷三〇九「⑨知藏道永化【歸善里鄭

氏二娘捨一千刊板二片為自身平安】⑨付詔」

297 大般若說羅蜜多經卷三三二「⑬来儀里鄭氏真求捨⑬付

詔」

305 大般若波羅蜜多經卷三四〇「②付詔刀②【連江永貴林

德郷捨一板折安【甲辰化主道永】」

333 大般若波羅蜜多經卷三六八「⑧【乙巳住神光比丘宗浩

捨十板】⑧付詔」

378 大般若波羅蜜多經卷四二二②住槃山端友捨□千二百
修板為□□②付詔」

道永の勸進活動は、東禪寺版の墨丁・追雕の項で既述したが、「甲辰」「乙巳」の干支の年にかかるものである。東禪寺版の事例から帰納された「甲辰」「乙巳」が、即ち淳祐四年・五年（日本寛元（一二四四・一二四五）と比定される。卷四八④板「付詔・卷二四七⑦板「詔」は、印面の現状から判断すると淳祐四年・五年の補刻葉の刻工名か、と考えられそうであるが、「付詔」の手に係る補刻葉は、道永の勸縁による施財刊語の板の他、施財刊語「廣東運使寺正曾噩捨」の補刻葉も担当していることに注意しなくてはならない。金沢文庫蔵大藏経にも、

298 大般若波羅蜜多經卷三三三②付詔刊②廣東運使寺正曾噩捨」

とある。東寺蔵一切経の内、東禪寺版『大般若波羅蜜多經』にも刻工名「付詔」は認められるが、すべて「廣東運使寺正曾噩捨」と結ばれている。卷三〇九⑨・卷三三二⑬・卷三四〇②・卷三六八⑧・卷四二二②は、道永勸化の施財刊語を有する補刻葉ではなく、すべて刻工名のない印面の摩滅甚だしいものばかりである。

即ち、東寺蔵一切経の内、東禪寺版は、道永勸化の淳祐

四年・五年頃以前の刷印に係るものであり、その点に関しては、既に指摘を了えている。

問題は、「付詔」という刻工の活躍時期である。（墨丁・追刻）のシステムを想定・導入する以前の旧来の判断―施財刊語と刻工名とを直接に結ぶ―を以てすれば、「付詔」は一二二〇年頃の「廣東運使寺正曾噩捨」の時点より一二四四・一二四五年頃の道永勸化の時期まで二十年間以上、東禪寺・開元寺両版の補刻事業に係ったように想像されてきたのである。

しかし、東禪寺版の墨丁・追雕の項の事例から類推可能となったことは、付詔の補刻時期は一二二四年頃の「廣東運使寺正曾噩」捨財による補刻葉の時点に極めて近い時期（一二二〇年代初前期頃を想定）で、その補刻時の墨丁箇所、約二十年後の道永化縁による施財を追雕した。その痕跡が【一】に囲まれた施財刊語であった、という事実である。

従って、佼成図書館蔵『大般若波羅蜜多經』卷四八④板の1・2面間版心「字 八卷 四【泉州德化祖明捨】付詔刀」は、「付詔」の補刻時点では

「字 八卷 四 [] 付詔刀」

であり、佼成図書館蔵『大般若波羅蜜多經』卷二四七⑦板（5面1紙）1・2面間版心「閏 七卷 七 □

(文字の未画少々残) 宗萬捨」詔刀」は、「付詔」の補刻時点では

「閏 七卷 七 詔刀」

であったのであろう、と推定できるのである。

道永勸化に応じた施主たちの長財は、追雕という形の〔東禪寺・開元寺両大蔵経補刻勸進刊行システム〕の中で版刻資金となつて廻っていたのである。詳細は、近刊のシンポジウム論文集所収「日本現存宋版大蔵経についての一、二の問題」に譲るので、御参照願いたい。

「衆縁を募る勸進開始の年月日、版木を刻雕した年月記、施財刊語として版心や尾題後のスペースなどへ追雕・入れ木などをした年月記、その乖離にこそ、連続して回転資金を廻し継続刊行していく大部な經典(「私版」大蔵経刊行など)の「開版勸進システム」の徴証があり、このシステムこそ北東アジアにおける經典刊行勸進活動のひとつの典型的なシステムではなかったか(日本の場合にも、適用可能なシステム)、と考えている」ことについて詳論した。

二 題記の問題と現存大蔵経の将来・遞蔵に関する「伝承」の再検討

東禪寺版・開元寺版について、題記の問題は極めて重要な課題を古くから研究者につきつけてきた。次に掲出する

のは東禪寺版卷首三行題記の典型的な例である。

福州東禪等覺院住持慧空大師冲真於元豐

三年庚申歲勤謹募衆縁開大蔵経印板一副上祝

今上皇帝聖壽無窮國泰民安法輪常轉

金剛峰寺藏東禪寺版『法苑珠林』卷第一(杜⁴⁸¹)の卷首の題記であるが、その卷末には、

弟子趙遠為亡室閏三十五娘請「僧礼誦仏名經一百部僧集成伯修等勸」……元豐八年乙丑歲六月十五日謹題」……

との施財記があることは小川貫弑氏「福州崇寧万寿大蔵の雕造」(『印度学仏教学研究』6・2 1958年)が留意されて、題記の年月が必ずしもその開板年月を示してはいないと指摘している。

同じく金剛峰寺藏東禪寺版『法苑珠林』卷第五十卷首

福州東禪等覺院住持傳法賜紫智華與僧契璋等謹募衆縁

恭為

今上皇帝太皇太后皇太后祝延聖壽國泰民安開鑿

大蔵経印板一副計五百餘函元豐三年六月 日謹題

との題記に対して卷末に

女弟子黄二十娘捨錢開此卷願延景福

元豐八年十月 日慧空大師 冲真

との施財記があり、同様な年記のズレがある。卷末の尾題後に年月の記はないものの、施財記を刻する事例が東禪

寺版には類出するが、詳細は省略する。

この題記の年記と施財刊語の年記との乖離が開元寺版にも認められることを、野沢佳美氏が金沢文庫蔵大藏経の開元寺版の事例を挙げて報告された（『金沢文庫蔵宋（福州）版一切経について』、『神奈川県立金沢文庫保管宋版一切経目録』一九九八年）。

また、近時、公刊された同氏「宋・福州版開元寺蔵の題記について―整理と問題点―」（『立正大学文学部論叢』129号 2009年3月）においても知恩院蔵の「開元寺蔵本にもいくつか確認」して問題を提起した。

ここで、題記の問題からの展開として、ひとつの重要な問題提起を紹介したい。

野澤氏「宋・福州版開元寺蔵の題記について―整理と問題点―」の指摘に次のような事例が報告されている。

「開元寺蔵の冒頭に置かれる『大般若波羅蜜多經』巻第一（天）の題記に二種類」があることである。すなわち、

【東寺蔵開元寺版『大般若波羅蜜多經』巻一（六百卷）〔仁治三（一二四二）年行遍東寺施入本〕】の題記は

福州開元禪寺住持伝法賜紫沙門本明与蔡俊臣陳詢陳靖
劉漸等募等緣恭為」今上 皇帝祝延 聖寿文武官僚同
資祿位雕造」毘盧大藏経印板一副計五百余函 時政和

乙未歳六月 日勸縁沙門 行崇謹題

であり、【知恩院蔵大藏経の内、開元寺版『大般若波羅蜜多經』巻一】の題記は

福州衆縁寄開元寺雕経都会蔡俊臣陳詢陳靖劉漸与證会
住持沙門本明恭為」今上 皇帝祝延 聖寿文武官僚同
資祿位雕造」毘盧大藏経印板一副計五百余函 時政和
乙未歳六月 日勸縁沙門 行崇謹題

である。野澤氏は、次のように記述している。「開元寺蔵本『大般若波羅蜜多經』巻第一の題記には、年月・題記執筆者は同一ながら、冒頭一行目に表記を異にする【東寺本】題記と【知恩院本】題記との二種がある」ということになる。

東寺は宋版大藏経一蔵を所蔵しており、その『大般若波羅蜜多經』は東禪寺版主体であり、巻一は東禪寺版で比較できないが、右に掲出した題記は仁治三（一二四二）年に行遍が東寺へ施入した『大般若波羅蜜多經』六百巻の巻一のもので、開元寺版である。知恩院蔵大藏経の内、開元寺版『大般若波羅蜜多經』巻一の題記と併せてみると、宋代開元寺版大藏経の『大般若波羅蜜多經』巻一第一板という同一經典の同一板に二種類の板木があったのであろうか。既に披見を了えている宋版大藏経に基づいた若干の知見から形態的な面について言及するならば、『国宝・重要文化

財大全（書跡 上巻）』七巻（毎日新聞社刊 1998年7月）所収東寺藏開元寺版『大般若波羅蜜多經』巻一（六百巻〔仁治三（一二四二）年行遍東寺施入本〕）の巻首書影によると、題記第一行「福州開元禪寺住持伝法賜紫沙門本明与蔡俊臣陳詢陳靖劉漸等募等緣恭為」は、とくに埋め木を推測させる痕跡を見ない。印面は清爽である。さらに第一板第五行下方に刻工一字名「劉」がある。

これらの情報に若干の知見を加えるならば、知恩院藏（大藏経の内）開元寺版『大般若波羅蜜多經』巻一第一板第五行下方にも刻工一字名「劉」があること、「二百二十六帖及び残欠が伝襲」（破石澄元・政次浩氏「中尊寺大長寿院藏宋版経調査概報」〈『中尊寺仏教文化研究所論集』2号 2004年3月〉）される中尊寺藏宋版大藏経の『大般若波羅蜜多經』巻三百一（大般若で残存する唯一のもの）は開元寺版で題記は、知恩院藏本と同じく

福州衆縁開元寺雕経都会蔡俊臣陳詢陳靖劉漸与證会住持沙門本明恭為」今上 皇帝祝延 聖寿文武官僚同資禄位雕造」毘盧大藏経印板一副計五百余函 時政和乙未歳六月日勸縁沙門 行崇謹題

である。第一行は全体に磨滅が認められ、とくに「福州衆縁寄開元寺雕経」の九文字は破損とも受け取られかねない印面で、網かけ箇所は判読不能、第一板の印面全体の

良好な印象とそぐわないものである。中尊寺藏宋版大藏経の「雜阿含経」巻四十六も開元寺版であるが、巻首題記三行分を空白にしており、刷印しなかったようである。こうした巻首題記部分三行空白の事例は、金沢文庫藏本・書陵部藏本などにも顕著に認められることは『神奈川県立金沢文庫保管宋版一切経目録』に既に指摘がある。知恩院藏本にも多い。

東禅寺版・開元寺版・思溪版の三版からなる混合藏の中尊寺藏大藏経について、前掲「調査概報」が開版刊記で「最も遅いものは開元寺版『阿育王伝』巻四などの紹興十八（一一四八）年」であり、また思溪版『法苑珠林』巻七十にある施入墨書に「紹興十六年八月」の年記があること、しかも『西字音釈』には「明州城下吉祥院大藏経」朱文印が捺され、思溪版『法苑珠林』巻八十一に「捨入吉祥大藏内」の施入墨書があること、これらの事実を踏まえて「吉祥院への入蔵が紹興十八（一一四八）直後に完了したとは考えにくい」と推定された。

少なくとも十二世紀半ば頃の刷印を予想できる中尊寺藏開元寺版『大般若波羅蜜多經』巻三百一の題記第一行が既に「福州衆縁寄開元寺雕経都会蔡俊臣陳詢陳靖劉漸与證会住持沙門本明恭為」と作り、とくに「福州衆縁寄開元寺雕経」の九文字は破損とも受け取られかねない状況であ

ること、これに十二世紀後末期頃刷印の知恩院藏大藏經の開元寺版『大般若波羅蜜多經』卷一第一板と第五行下方の刻工一字名「劉」が同じであることを併せ考慮するならば、必然的に仁治三年施入本の東寺藏開元寺版『大般若波羅蜜多經』卷一の題記、すなわち、題記第一行「福州開元禪寺住持伝法賜紫沙門本明与蔡俊臣陳詢陳靖劉漸等募等縁恭為」と作る三行題記が入れ木前の、より早印のものとの判断せざるをえないのである。この題記第一行目を未刷印空白に作る經典帖冊もある〔醍醐寺藏本など〕。本明と蔡俊の位置（役職）の逆転が重要な意味をもつものなのか、不審点は今後の課題として残る。

東寺藏大藏經に例を採れば、更に奇妙なことにいろいろなケースに出くわすのである。『大寶積經』を例にして示すならば、次のようである。①や②は、それぞれ一板と二板を指す。従って「①陳通刊（1・2間）」は、一板の第一面と第二面の間に版心があり、刻工の名を含めて「陳通刊」と刻することを表す。なお、ここに使用した東寺藏大藏經の調査資料は既に多くを例示したものである（二〇〇四年京都国立博物館での研究報告）。

a 大寶積經 卷一 千字文「龍」 題記「福州衆縁寄開元寺雕經都會蔡俊臣陳詢陳靖劉漸与證會住持沙門本明恭為／今上 皇帝祝延 聖寿文武官僚同資禄位雕造／毘盧大藏經

印板一副計五百余函 時政和壬辰歲十月 日勸縁沙門本悟謹題」①淺刀（1・2間） 施財刊語「候官縣聚星里冥泗得捨五片祈保平安」（1面6行）

以下、参考までに墨丁箇所を三例挙げておく。

b 大寶積經 卷二 千字文・題記：卷一に同じ ①陳通刊（1・2間） ⑨「龍 二卷 九 [] 印面良。

c 大寶積經 卷五 ⑨「龍 五卷 九 [] 印面良

d 大寶積經 卷十 ⑪「龍 十卷 十一 [] 印面良

e 大寶積經 卷十一 千字文「師」 題記：卷一に同じ ①林賜（2・3間） 施財刊語「候官縣新興里信女江氏五四娘捨」⑦「師 一卷 七 [] 印面良、第

二・四面も墨丁

f 大寶積經 卷二十一 題記：「福州衆縁寄開元寺雕經都會蔡俊臣陳詢陳靖劉漸与證會住持沙門本明恭為／今上 皇帝祝延 聖寿文武官僚同資禄位雕造／毘盧大藏經印板一副計五百余函 時政和壬辰歲十一月 日勸縁沙門行崇謹題」

①刻工名無し 施財刊語「住香嚴比丘妙傑為先師圓庵和尚捨」（3面2行下方） 印面良

g 大寶積經 卷二十二～二十六 千字文「火」 題記「福州衆縁寄開元寺雕經都會蔡俊臣陳詢陳靖劉漸与證會住持沙

門本明恭為」今上 皇帝祝延 聖寿文武官僚同資祿位雕造」毘盧大藏經印板一副計五百余函 時政和乙未歲十月日勸緣沙門 本悟謹題」

h 大寶積經 卷二十七 千字文「火」 題記：三行分未刷

(5・4 cm幅) ①刻工名無し 印面良

i 大寶積經 卷二十八 千字文「火」 題記：三行分未刷

①刻工名無し「住閩清仁王院比丘處瑛捨」(1面6行)

印面良

j 大寶積經 卷二十九 千字文「火」 題記：三行分未刷

(參考：匡郭天辺に一部見ゆ「」と) ①(2・3間)

「浚刀／懷安縣鍾山里李氏五四娘祈保平安捨」(2・3間)

印面良

k 大寶積經 卷三十 千字文「火」 題記：卷一に同じ

①(1面6行下) 懷安縣孝仁里鄭太庚敬捨祈保平安／

(2・3間) 浚」 印面良

l 大寶積經 卷四十一 千字文「烏」 題記「福州衆緣寄

開元寺雕經都會蔡俊臣陳詢陳靖劉漸与證會住持沙門本明

〔1格分アケ。入れ木の問題が係わるか〕恭為／今上 皇

帝祝延 聖寿文武官僚同資祿位雕造／毘盧大藏經印板一副

計五百余函 時政和壬辰歲十月日勸緣沙門本悟謹題」 ①

〔陳延〕(2面1行下方) 印面良

m 大寶積經 卷四十四 千字文「烏」 題記「福州衆緣寄

開元寺雕經都會蔡俊臣陳詢陳靖劉漸与證會住持沙門本明恭為／今上 皇帝祝延 聖寿文武官僚同資祿位雕造／毘盧大藏經印板一副計五百余函 時政和壬辰歲十月日勸緣沙門行悟謹題」 ①刻工名無し 印面良

n 大寶積經 卷四十六 千字文「烏」 題記「福州衆緣寄

開元寺雕經都會蔡俊臣陳詢陳靖劉漸与證會住持沙門本明■

恭為／今上 皇帝祝延 聖寿文武官僚同資祿位雕造／毘盧

大藏經印板一副計五百余函 時政和壬辰歲十月日勸緣沙門

本悟謹題」 ①「林盛」 印面良

o 大寶積經 卷四十八 千字文「烏」 題記：三行分未刷

①刻工名無し「住浦華嚴比丘覺尹為恩友捨」(1面6

行) 印面良

p 大寶積經 卷四十九 千字文「烏」 題記「福州衆緣寄

開元寺雕經都會蔡俊臣陳詢陳靖劉漸与證會住持沙門本明

(二字分空格)／今上 皇帝祝延 聖寿文武官僚同資祿位

雕造／毘盧大藏經印板一副計五百余函 時政和壬辰歲十月

日勸緣沙門本悟謹題」 ①刻工名無し「住閩清仁王院比丘

處瑛捨」(1・2間) 印面良

n 卷四十六には刻工名「林盛」とあり補刻葉であること

が判明し、p 卷四十九には施財刊語「住閩清仁王院比丘處

瑛捨」(1・2間) がある。いずれも印面良好で、題記も

原刻ではないことが知られる。その際に n 卷四十六の題記

一行目「本明」の下にゲタ状に「■」があることやp巻四十九の題記一行目「本明」の下に「恭為」二字分が空格になつてゐることは留意される。補刻の際に底本とした原刻葉の題記一行目のゲタ状の「■」や「恭為」二字分の判読不明箇所が存在した可能性を想定できそうである。

若干の知見を加えるならば、「二百二十六帖及び残欠が伝襲」（破石澄元・政次浩氏「中尊寺大長寿院藏宋版経調査概報」《『中尊寺仏教文化研究所論集』2号 2004年3月）される中尊寺藏宋版大藏経の『大般若波羅蜜多經』卷三百一（大般若で残存する唯一のもの）は開元寺版で題記は、知恩院藏本と同じく

福州衆縁開元寺雕経都会蔡俊臣陳詢陳靖劉漸与證会住持沙門本明恭為／今上 皇帝祝延 聖寿文武官僚同資禄位雕造」毘盧大藏経印板一副計五百余函 時政和乙未歲六月日勸縁沙門 行崇謹題

である。第一行は全体に磨滅が認められ、とくに「福州衆縁寄開元寺雕経」の九文字は破損とも受け取られかねない印面で、網かけ箇所は判読不能に近く、第一板の印面全体の良好な印象とそぐわないものである。《修》のの行われた形跡が認められるのである。第一行を全体か、部分か、慎重な判断を俟ちたいが、削りとり「入れ木」をした結果であろう。即ち、原刻葉題記第一行目「福州開元禪寺

住持伝法賜紫沙門本明与蔡俊臣陳詢陳靖劉漸等募等縁恭為」を削り、入れ木して「福州衆縁開元寺雕経都会蔡俊臣陳詢陳靖劉漸与證会住持沙門本明恭為」とつくつたのである。

また、卷二十七から卷二十九は、卷首題記三行分は空白になつており刷印しなかつた事例である。こうした卷首題記部分三行空白の事例は、刷印時期の極めて早い中尊寺藏宋版大藏経に指摘でき、東寺藏大藏経より早印の知恩院藏大藏経にも認められるものである。中尊寺藏宋版大藏経の『雜阿含経』卷四十六も開元寺版であるが、卷首題記三行分は空白になつており刷印しなかつたようである。こうした卷首題記部分三行空白の事例は、金沢文庫藏本・書陵部藏本などにも顕著に認められることは『神奈川県立金沢文庫保管宋版一切経目録』に既に指摘がある。卷首題記部分三行空白の事例は知恩院藏本にも多いが、事例は省略する（知恩院藏宋刊大藏経調査の具体的なデータに多くの知見を得ているが、今回は略す）。

醍醐寺藏大藏経には、題記第一行の刷られていないケースが頻出する。試みに、開元寺版の『大般若波羅蜜多経』で示すならば、卷第一〜二十（千字文番号：天・地）迄はすべて題記三行を刷印し、「福州衆縁寄開元寺雕経都会蔡俊臣陳詢陳靖劉漸与證会住持沙門本明恭為／今上 皇帝祝

延 聖寿文武官僚同資祿位雕造／毘盧大藏經印板一副計五百余函 時政和…歳…月 日勸縁沙門行崇謹題」と作る。
以下に卷第二〇〇～三〇〇迄を例に題記第一行未刷のケースを報告する。

卷第二百四十七 閏 第一行未刷

卷第二百四十八 閏 第一行未刷

〔第一行空白〕／

今上 皇帝祝延（一）文武官僚（一）祿位雕造□／

毘盧 時政和乙未歳十月日勸縁沙門行崇 謹題／
とある。

題記第一行未刷のケースであり、

〔福州衆縁寄開元寺雕経都会蔡俊臣陳詢陳靖劉漸与證会
住持沙門本明恭為（刷印なし・空白）／今上 皇帝祝延

聖寿文武官僚同資祿位雕造／毘盧大藏經印板一副計五百

余函 時政和…歳…月 日勸縁沙門行崇謹題〕

網掛け部分が空白で刷られていないのである。

こうした例は、試みに挙げれば、以下の通りである。

卷数 題記政和月

第一板刻工名 第二板印面状態

卷二百三十一 歳 十月 行崇、
卷二百三十二八月日

〔正〕 良

〔王忠刀〕 良

卷二百三十三三月日 〔丁光刊〕 良

卷二百三十四八月日 〔王右〕 良

卷二百三十五十月 〔興〕 良

卷二百三十六八月 〔木刀〕 良

卷二百三十七十月 〔王右刀〕 良

卷二百三十八十月 〔ナシ〕 良

卷二百三十九八月 〔王忠刀〕 良

卷二百四十八月 〔王忠刀〕 良

卷二百四十一乙未歳三月日 行崇 〔賜刀〕 良

卷二百四十二十月 行崇 〔附刀〕 やや良

卷二百四十三十月 行崇 〔木工田刀〕 良

卷二百四十四十月 〔奴〕 普通

卷二百四十五十月 〔記〕 良

卷二百四十六十月 〔曹高〕 良

卷二百四十七前出 〔蔡四十二〕 普やや悪

卷二百四十八十月 〔附刀〕 良

卷二百四十九十月 〔ナシ〕 普

卷二百五十八月 行崇 〔丁〕 良

卷二百五十一～二百六十迄〔陳清造〕〔单椀墨文印〕

卷二百五十一 餘「八月 行崇」 [劉] 良

卷二百五十二「十月（入れ木？）」 [盈] 良

卷二百五十三「五月 行崇」 [仲] 普通

卷二百五十四「政和丙申歲 正月日 行崇」 [宗] 普通

卷二百五十五「乙未歲 八月」 [盈] 良

題記三行存のケース、即ち

「福州衆縁寄開元寺雕經都會蔡俊臣陳詢陳靖劉漸与證會
住持沙門本明恭為／今上 皇帝祝延 聖寿文武官僚同資祿
位雕造／毘盧大藏經印板一副計五百余函 時政和…歲…月
日勸縁沙門行崇謹題」

とある。こうした例は、挙げれば以下の通りである。

卷二百五十六「丙申 十月日 行崇」とあり、第一行存「…〔ナシ〕沙
門本明恭為」のみ印刷 [志才] 普通

卷二百五十七 [達刊] 良

卷二百五十八 ナシ 良

卷二百五十九 [立] 良

卷二百六十 [賜] 良

卷二百六十一 成「三月日 行崇」とあり、「福州衆縁寄開元寺…沙
門本明恭為」のみ印刷

卷二百六十二「十月 行崇」二行目右に同じ。 [立] 良

卷二百六十三 [賜] 良

卷二百六十四「丙申四月日 行崇」とあり、一行目「福州衆縁就開元寺
…」 [ナシ] 良

卷二百六十五 [ナシ] 良

卷二百六十六 [ナシ] 良

卷二百六十七 [曹高] 良

卷二百六十八 [元] 普通

卷二百六十九 ナシ やや悪

卷二百七十 [仲] 良

卷二百八十七 第一行未刷、「劉照造」 [ナシ] 普通

卷二百八十九 題記三行存、「劉照造」 [達刀] 普通

刻工名を検討すると、卷二百五十一などは第一板の刻工
名「劉」でほぼ確実に原刻葉か、と推定でき、題記第一行
が「福州開元禪寺住持伝法賜紫沙門本明与蔡俊臣陳詢陳靖
劉漸等募等縁恭為」とあるために、第一行を敢えて刷印し
なかったのか、とも考えられる。印面が良好であることも
あり、原刻葉でない可能性も検討しなければならないが、
醍醐寺蔵大藏經の刷印時期などを勘案すると、いずれか、

とも決し難いのである。個々の帖の印面に直接当たって注意深い判断を下すほかない。その際、題記第一行未刷のケースは、題記一行目を板木に彫刻しなかった、とも考えられようが、題記一行目を敢えて刷らなかつた可能性も考えられるのである。

卷二百八十七 第一行未刷、「劉照造」 ナシ

普通

卷二百八十九 題記三行存、「劉照造」 「達刀」

普通

刷り手（印造者）が同じ劉照である卷二百八十七・二百八十九は卷二百八十七が第一行未刷、卷二百八十九が題記三行存という異なりをしめしており、その理由に就いても今後の課題として残るのである。

かくて、題記第一行未刷のケース・題記三行未刷空白の事例は、題記第一行を「福州開元禪寺住持伝法賜紫沙門本明与蔡俊臣陳詢陳靖劉漸等募等縁恭為」と作る原刻葉と題記第一行を「福州衆縁寄開元寺雕経都会蔡俊臣陳詢陳靖劉漸与證会住持沙門本明恭為」と作る入れ木修補葉の問題に緊密に絡む可能性が極めて高いことが予想できることになった。

今後の課題として多くの問題点が明らかとなったが、その過程で一つの重要な事実が浮上してきたのである。その

点について指摘し、この稿を終えたい。

開元版の題記第一行をめぐる検討を通じて、仁治三（一二四二）年に行遍が東寺へ施入した『大般若波羅蜜多經』六百卷は原刻で、極めて早印、初印に近いものであろう、との推測が可能になったのである。従って、行遍は、十二世紀半ば頃（一一四〇年代）以前刷印の開元寺版『大般若波羅蜜多經』六百卷を、仁治三（一二四二）年に東寺へ施入したことになる。

こうした施入のケースを考えると、中国における刷印時期と中国寺院などでの保管活用時期、日本への舶載時期さらに我国寺院などへの施入時期を明確に区分して判断しなければならぬことに思い至るのである。刷印時期から舶載時期まで（舶載時期から施入時期まで）の時間的な「ズレ」は、その間の唐土における（日本における）保管・活用を想定せざるをえない。蔵書印・書き入れ（墨筆・角筆など）の丁寧な検討が期待されるのである。醍醐寺蔵大蔵經（十二世紀末期頃刷印）の舶載将来に関する「伝承」について、中世以降の「頼賢」伝の欠落部分（「入唐」をめぐる諸相）を軸にした一記事を提示したい。もちろんの可能性のひとつとして考察する材料を掲出するに過ぎないが、頼賢（意教）の伝記箇所との関連などにも及ぶものである（牧野「中世前期学僧と近世書写一寺院縁起を

めぐる二、三の問題」『実践国文学』76号参照。

宋版一切経将来に関する記事は次の通りである。この記事は、随心院藏『證道上人集作』収載のものである。『證道上人集作』は、別名『證談鈔』などとも呼称する書物で、醍醐寺などにも所蔵される。書誌事項などを含め、全文を『随心院聖教と寺院ネットワーク』1集(2004年3月)に翻刻紹介したので参照願いたい。

實賢事

仰云實ハ勝賢ニ遂灌頂ハ四月也僧正ノ化界ハ七月ナリサル程ニ受法不終功ニ其後範賢並靜

遍ニ三寶院方ヲハ受給ケルトカヤ故意教上人

唐本ノ一切経ヲ自ラ宋朝ヨリ請来セラレタリ此ノ

一切経供養ヲ西西ニテ被遂ニ導師ニハ實賢ヲ召請

シ玉ヘリ其時實賢唱導ノ次ニ面々ノ院家ハ

参_{テモ}可申_一候ヘトモ今次能候ヘハ述懐申ヘ

シトテ静遍ノ許_{ヨリ}三寶院ノ方ヲハ伝授ス其外尚

範賢ニ相承ス是故ニ我身ハ遍知院ニ孫弟也相

構門徒ノ人々我身不可隔ニ云々

本書には、二十九丁裏に成立に関する原奥書がある。

寫本云

于時正中第二曆沾洗三月下旬之比有人

受師主口傳_一当流書籍以下存知事被

記之予此事聞得テ懇望之間被許披覽

了仍此三帖誠七句老眼寫留了但根

本之本卷物即雙子ニ成畢

金剛資心曉七十二才

この奥書に拠れば、証道上人実融に受法した「有人」が、実融の口伝による「当流(三宝院カ)書籍以下存知事」を記し留めたものであり、実融の師は、意教上人頼賢である内容を含むものである。実融の師は、意教上人頼賢であり、この原奥書を文字通り信ずるならば、掲出の一項「実賢事」に「記留」められたように、意教上人は「唐本ノ一切経ヲ自ラ宋朝ヨリ請来」し、実賢を導師に請じて醍醐寺で「一切経供養」をしたのである。おそらく唐土より帰国して間もない頃のことであった、と思われる。

* * *

本稿は、科学研究費基盤研究(A)(課題番号(20242015))の分担研究に拠る宋版大藏経の調査を基底に据えた成果である(調査に御協力戴いた同学諸氏に厚く御礼申し上げます)。

また、東寺藏宋版大藏経などの調査データは、冒頭にふれた京都国立博物館での口頭発表の際の整理資料などに基くものである。

閲覧・調査・データ活用に御許可を頂いた醍醐寺・知恩院・中尊寺・東寺に対し深甚な謝意を表するものである。

(まきの かずお・実践女子大学教授)